

伝え

学会への提言

臼田 甚五郎

閑談のつもりで聞いて下さい。昭和49年6月にフィンランドのヘルシンキで第6回口承文芸国際会議が開催されました。この会議に出席した私は、往復の機内で韓国の崔仁鶴君と一緒に、このような国際会議を東洋で開ければと話し合いました。崔君は早速、昭和51年5月に韓国江陵市の関東大学で東北アジア民俗学シンポジウムを企画し、関敬吾さん（故人）、直江広治さん（故人）、大林太良さん、私を報告者として招いてくれたのです。関さんは病気で出席できませんでしたが、その江陵で私たちは日本にも口承文芸学会を作るということで意見が一致しました。

こうして昭和52年5月24日に日本口承文芸学会が誕生したのです。設立以来、20年がたちました。この機会に、会員の方に、もう一度考えていただきたいことがあります。

第一は、口承文芸の国際会議を日本で開いて欲しいということです。第二は、その前段回として口承文芸研究資料センターを早急に作らなければならないということです。第三は、学会には専門の大事典が必要

ですから、『口承文芸大事典』を刊行すること。出版社は簡単には引き受けられないから、自前で編集プランを作成してから出版社と交渉するとか、学会を援助してくれるような財団から寄付を受けて編集するとか、いくつか方法があるのではないのでしょうか。

これが、いうならば、大目標ですが、この1～2年でいえば、学会として口承文芸における歴史性を見つめ直して欲しいので口承文芸の歴史性追求のシンポジウムをやってほしいと思っています。1月に福田晃君が文献と民俗を駆使した『神話の中世』（三弥井書店）という本を出しましたのでこれを基にすると良いでしょう。観念的、形式的なシンポジウムは面白くないですから。また、これが出来る国は世界でも少ないので、ぜひ、文献も豊富な日本でこのシンポジウムをやって欲しいのです。さらにいえば、上海で中国の民間故事集成が続いて出版されていますが、こういう本を機関誌や会報で紹介して欲しいという気持ちもあります。

（口述筆記—編集部）

第21回 日本口承文芸学会 大会のお知らせ

月日 平成9年6月7（土）～8（日）日

場所 常葉学園短期大学（静岡県）

公開講演・シンポジウム・
研究発表・会員総会・懇親会
などを予定しています。
詳細は後日お知らせします。

第32回研究例会発表要旨('96.10.19)

葬歌とシマウタの生成

—奄美・徳之島の事例から—

酒井 正子

徳之島には一般庶民のための豊富な葬歌群が伝承され、歌謡の生成・発展を考える上で重要な示唆を与える。すべて無伴奏で歌われ、葬儀の〈供養歌〉から死後の〈哀惜歌〉まで様々な曲種がある。ここでは短詞型歌謡である〈哀惜歌〉がシマウタ(あそび歌、掛け歌、三味線歌)の有力な源泉の一つであることを示し、その生成過程を検証する。

〈哀惜歌〉は、葬儀の直後、故人の近親者が、どうしても紛らせない寂しい思いを口ずさむ。未だ周囲に留まる死者の霊との歌掛けともとれる状況で、代表的な曲は《やがま節(やがましょ)》と《二上り節(にあがりしょ)》である。《やがま節》はタブー性が強く、旋律も歌詞も一人一人異なる個人様式の曲で、現在は殆ど廃れている。一方《二上り節》は〈哀惜歌〉として歌われるほか何十年も経て死者を思い出す時、また自らが逝く状況へと循環しながら繰り返し歌われ、さらに旅送りや婚礼の別れも歌う。《やがま節》を包み込む形で成立したスケールの大きな曲で、今日代表的なシマウタとして広く親しまれている。

旋律的には、《やがま節》は上下句同旋律の反復的な構成が基本だが、同一性が弱く、個人差が大きい。一方《二上り節》は集落共有のフシが確立し、上句部分の旋律は《やがま節》と似るが、下句部分は独自に展開する。前者のアルカイックな反復性に対し、後者は一節ごとの区切りが明確で、有節的、通作的な音楽様式が確立しているのである。さらに《やがま節》と関連の深い他のシマウタも含めて比較考察すると、後バヤシを付加して区切りを明示し、合いの手のハヤシをはさむなど、個人的な〈哀惜歌〉から一般的な歌掛けのあそび歌への展開が、明確に跡づけられる。

ところで、死や悲憤、痛恨などを歌う〈哀惜歌〉の伝統は、実は琉球弧全域にベーシックにみられる。ナークニー、トウバラーマ、スンカニなどの代表的な短詞型歌謡は、いずれも〈哀惜歌〉との関わりが深く感じられるが、それらの検証は今後の課題としたい。(東京都)

第32回研究例会発表要旨('96.10.19)

アイルランドにおける語りの伝統

—ケルトの古歌『ブランの航海』をめぐって—

松村 賢一

アイルランドにおける語りの伝統は今日まで脈々と流れているが、詩人は古くから語り部の重要な担い手であった。ケルトの古歌『ブランの航海』はこの語りの原点とでもいうべき詩を中心にした最古の伝承のひとつであり、七世紀頃に成立したと考えられている。

この古伝承はブランの異界行の物語であり、生と死をめぐって多くの異界の風景が組み込まれている。ケルトの異界の大きな特徴のひとつは、現世において、人間が妖精に誘われて訪れることのできる、はるか西方の海上の島、至福の国である。この異界はケルト神話の中で発展してきたものだが、数多くの小島が浮かぶアイルランドの地理上の特色とか、ケルトの民の生活、また中世における聖人巡礼などと深く関わっている。その根底には人間にとって到達不可能な楽土の空間にたいする憧憬と永遠の生への願望がある。そこは黄金の花が咲き乱れ、果実がたわわに実り、銀が降りそそぎ、鳥たちが陽気に歌い、食物と美酒が豊富で、「苦惱もなく、悲哀もなく…病もなく、衰弱もない」不老不死の「女人の国」である。

常世を想起させるこのような異界では、人間はある時期に必ず郷愁の念におそわれる。妖精は異界を離れる者に「アイルランドの地に足を触れてはならない」と警告し、禁忌を与える。異界での3年が現実世界では300年経っている。故郷へ帰還し、舟が岸辺に着いた時、ブランの仲間一人が喜んで飛び降りたとたんには彼は灰と化してしまう。禁忌を破ることによって、彼岸と此岸の時間の落差が一瞬に吹き出す仕掛けになっている。日本の「他界」ということばは死後の世界を意味することが多いが、かつて古代人は海界(うなさか)の彼方に常世の国を想像したことがあり、『古事記』や『日本書紀』などにも常世についての記述が現れている。とりわけ、『万葉集』や『丹後風土記』逸文に現れる浦島子の「眠り」の装置による常世行と帰還、玉匣と禁忌、時間の経過などとケルトの異界の物語の比較考察はすこぶる興味深い。(東京都)

千川

- (書名／編著者／発行所／発行年)
 昔話の伝承世界—その歴史的展開と伝播
 武田正 岩田書院 1996.3
 川崎の世間話「川崎の世間話」調査団
 編 川崎市民ミュージアム 1996.3
 語られざるかぐや姫—昔話と竹取物語
 高橋宣勝 大修館書店 1996.3
 白幡ミヨシの遠野がたり 吉川祐子
 岩田書院 1996.4
 新六ずんつあんのおもしろ話—宮城県栗
 駒山麓の民話 佐藤照一・秋山伸司
 みやぎ民話の会 1996.6
 白田甚五郎著作集第五集—口承文芸研究
 おうふう 1996.7
 唄ってけらえん 語ってけらえん—只野
 とよの昔語り 長須賀直子 みやぎ民話
 の会 1996.7
 越後松之山の伝承—『民話と文学』第29
 号 民話と文学の会 1996.10
 山陰の民話 酒井重美 渡部総合プリン
 ト 1996.11
 口承文学I—『日本文学史』第16巻
 岩波書店 1997.1
 湯西川のざっとむかし—湯西川の生活と
 昔話 中本勝則・高橋伸樹 新風社 1997.1
 口承文学大概 白田甚五郎 おうふう
 1997.1

- 同志社国文 45号
 同志社大学国文学会 '96.12
 奈良県立民俗博物館だより Vol. X XII No. 1
 通巻第71号
 奈良県立民俗博物館 '96.8
 アイヌ民族文化研究センターだより No. 5
 北海道立アイヌ民族文化研究センター '96.9
 日本音楽史研究 第1号 '96.5
 上野学園日本音楽資料室
 大島・喜界 両島資料雑纂
 改訂名瀬市誌編纂委員会 '96.3
 地域ニュース No. 4
 国立民族学博物館地域研究企画交流センター '96.10
 近松研究所紀要 第7号
 園田学園女子大学近松研究所 '96.11
 昔話の伝承と再生—再話の位置—
 如月六日／如月六日事務所 '96.9
 中種子町昔話集—鹿児島県鹿毛郡中種子町—
 大谷女子大学説話文学研究会 '96.10

ありがとうございました。今後ともご協力お願い申し上げます。

----- [事務局報告] -----

受贈書リスト

- 日本民話の会通信 No.126~129
 日本民話の会 '96.7~'96.11
 国文学研究資料館報 No.46号~47号
 国文学研究資料館 '96.3/'96.9
 日本民俗学 206~208号
 日本民俗学会 '96.5~'96.11
 日本民俗学会報・日本民俗学総目録
 日本民俗学会 '95.7
 民具マンスリー 29巻4~10号
 神奈川大学日本常民文化研究所 '96.7~'97.1

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。

入会金 1000円 年会費 4000円

入会申込書請求先：〒150東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内

日本口承文芸学会事務局 ☎03-5466-0224

送金先：[郵便振替] 00180-4-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. J. Nomura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150, Japan

口承文芸に関心のある方を広くご紹介下さい

☆ 編集担当は、大島広志・中川裕・中村とも子です。